

日付	曜日	活動内容 & 場所	備考
6月1日	月	研修 振り返り	
6月2日	火	Blooming Tree Primary School	ABAコンサルタント説明
6月3日	水	Blooming Tree Primary School	OT説明、ABAコンサルタント説明
6月4日	木	Blooming Tree Primary School	ABAコンサルタント説明
6月5日	金	Blooming Tree Primary School	SLT説明、ABAコンサルタント説明
6月6日	土	休み	
6月7日	日	休み	

～一人ひとりの参加と成長を支えるために、多職種が科学的に協働する教育～

(2026年6月1日～7日)

研修施設： Blooming Tree Primary School

Blooming Tree Primary School は、3歳から11歳までの約60名が通う特別支援学校である。ABAコンサルタント、OT、SLT、Tutorなど約60名の職員が在籍し、多職種連携による教育・支援を実践している。

Blooming Tree Primary Schoolでの研修では、クラス見学、ABA（応用行動分析）の講義、ABAコンサルタント、作業療法（OT）および言語聴覚士（SLT）の実

践、多職種連携、保護者支援について学ぶ機会を得た。ABA（Applied Behaviour Analysis：応用行動分析）とは、人の行動と環境との関係を科学的に分析し、望ましい行動やスキルの獲得を支援する方法である。行動の背景にある要因や機能を理解し、適切な環境調整や強化を通して、コミュニケーション能力や社会性、自立に必要なスキルの向上を目指す。研修を通して最も強く感じたことは、子ども一人ひとりの参加と成長を支えるために、多様な専門職が共通の目標のもとで協働し、科学的な視点をもって教育を実践していることであった。

学校では、ABAコンサルタント、作業療法士（OT）、言語聴覚士（SLT）、ABA Tutorなどが日常的に連携していた。それぞれが独立して支援を行うのではなく、子どもの姿を共通の視点で捉えながら、一人ひとりの目標達成に向けて役割を分担していた。特に印象的だったのは、専門職による支援が特別な活動として切り離されるのではなく、授業や遊び、生活の場面の中に位置づけられていたことである。支援の中心には常に子どもの生活があり、専門性はその生活を支えるために活用されていた。



また、その専門性を現場全体で共有する仕組みも整えられていた。ABA コンサルタントは子どもの評価やプ



ログラム作成だけでなく、日常的に子どもと関わる Tutor へのトレーニングやフィードバックも行っていた。Tutor は専門職から継続的な指導を受けながら支援を実践しており、専門職が持つ知識や技術が日々の教育活動の中に反映されていた。専門職が支援を担うだけではなく、現場全体の支援力を高める仕組みが構築されていることも、Blooming Tree の大きな特徴であると感じた。



Written Room Timetable		
Time	Activity / Lesson	Actual Res. Time
08:45 - 09:00	GT Programme / Individualised Programme	
09:00 - 09:30	GT Programme / Individualised Programme	
09:30 - 09:45	Prepared Time (not working)	
09:45 - 10:00	SLT Programme / Individualised Programme	
10:00 - 10:15	Snack	
10:15 - 10:30	Working	
10:30 - 10:45	Direct Instruction / Group 1	
10:45 - 11:00	Direct / Instructional Breakout	
11:00 - 11:15	Individualised Programme	
11:15 - 11:30	Self-help Skills / Working	
11:30 - 11:45	Lunch	
11:45 - 12:00	Social Play	
12:00 - 12:15	Individualised Programme	
12:15 - 12:30	Learned this week's story of the month	
12:30 - 12:45	Prepared Time (not working)	
12:45 - 13:00	SLT Programme / Individualised Programme	
13:00 - 13:15	Individualised Programme	
13:15 - 13:30	GT Programme / Working	
13:30 - 13:45	Story Time / Home Time Routine	

クラス見学では、子どもたちの小さな成長を職員全員で共有し喜び合う姿を見ることができた。これまでできなかったことができるようになった瞬間を、教師や専門職と一緒に喜び、その成功体験を子ども自身にも実感させていた。その姿からは、教育とは単に知識や技能を教えることではなく、一人ひとりの可能性を信じ、その成長を支える営みであることを改めて感じた。

ABA の講義では、「行動はコミュニケーションである」という考え方を学んだ。私たちは日常の中で、泣く、叩く、逃げる、叫ぶといった行動を問題として捉えがちである。しかし ABA では、その行動の背景にある機能を理解することが重要であると考え



ことが重要であると考え。子どもは何を得ようとしているのか、何を伝えようとしているのか、何から逃れようとしているのか。その意味を理解しようとするのが支援の出発点となる。

また、ABA では行動の結果だけではなく、行動が起きた背景やその後の結果を観察し、データとして分析することが重視されていた。支援者の感覚や経験だけに頼るのではなく、事実を積み重ねながら支援方法を検討する姿勢は非常に印象的であった。さらに、問題行動をなくすことを目的とするのではなく、より適切なコミュニケーション手段や行動を身につけられるよう支援するという考え方にも深く共感した。

作業療法士による講義では、「参加」を中心に据えた支援の考え方を学んだ。感覚特性、運動機能、認知機能、生活スキルなどを詳細に評価しながらも、その目的は機能の改善そのものではない。子どもが学校生活や社会生活に主体的に参加できるようになることが最終的な目標とされていた。評価結果に基づいて個別支援プログラムが作成され、多職種が連携しながら継続的な支援と再評価を行う仕組みも整備されていた。



言語聴覚士（SLT）による講義では、「話すこと」そのものではなく、「コミュニケーションに参加すること」を中心に据えた支援の考え方を学んだ。評価では、受容言語や表出言語だけでなく、口腔機能、摂食・嚥下、感覚特性、社会的コミュニケーションなども含めて多面的に子どもの姿を捉えていた。その目的は発話能力の向上だけではなく、子どもが自分の意思や気持ちを周囲に伝え、学校生活や社会生活に主体的に参加できるようになることであった。発話による表現が難しい場合には、PECS や AAC（拡大・代替コミュニケーション）なども活用し、一人ひとりに適したコミュニケーション手段を保障していた。

また、保護者支援についても多くの学びがあった。保護者は子どもの成長をともに支えるパートナーとして位置づけられていた。学校では、子どもの様子や支援内容について継続的に共有が行われており、多職種と保護者が同じ方向を向いて子どもの育ちを支えていることが感じられた。

実際に保護者が「この子、本当に笑顔が増えたんです」と嬉しそうに話される姿を目にしたとき、支援の成果とは何かを改めて考えさせられた。新しいスキルを獲得することや問題行動が減ることも大切である。しかし、それ以上に子ども自身が安心して過ごし、自分らしく生活できること、そしてその姿を見た家族が希望や安心感を持てることこそが支援の本当の価値なのだと感じた。

今回の研修を通して学んだ「参加」という考え方は、子どもだけに向けられるものではないように思う。子どもが学校生活に主体的に参加できるようになることで、家族もまた子どもの成長を実感し、安心して子育てに参加することができる。子どもの笑顔が家族の笑顔につながり、家族の安心が子どもの育ちをさらに支える。そのような循環こそが私自身がこれからの保育の中で大切にしていきたい視点である。

今回の研修を通して、私が最も大きな学びとして受け取ったのは、「教育とは科学である」ということである。保育や教育の現場では経験や感覚も重要である。しかし、それだけでは十分ではない。Blooming Tree では、子どもの行動や成長を客観的に観察し、記録し、分析し、その結果をもとに支援方法を検討していた。何が起きたのかという事実を丁寧に積み重ね、仮説を立て、実

今回の研修を通して、私が最も大きな学びとして受け取ったのは、「教育とは科学である」ということである。保育や教育の現場では経験や感覚も重要である。しかし、それだけでは十分ではない。Blooming Tree では、子どもの行動や成長を客観的に観察し、記録し、分析し、その結果をもとに支援方法を検討していた。何が起きたのかという事実を丁寧に積み重ね、仮説を立て、実

践し、再評価する。その姿勢はまさに科学的なアプローチであり、専門職としての責任ある実践であった。

一方で、教育は科学だけで成り立つものではないことも同時に学んだ。ABA の実践でも、作業療法の支援やでも、常に土台となっていたのは子どもとの関係性であった。まず安心できる関係を築き、子どもを理解しようとする姿勢があるからこそ、観察や分析が意味を持つ。データと関係性、科学性と人間性、その両方が支援には必要であることを実感した。

今回の研修を通して、私は改めて「教育は誰のためにあるのか」という問いについて考えさせられた。

日本は障がい者権利条約を批准し、現在、国連から分離教育に関する是正勧告を受けている。しかし、今回 Blooming Tree で見た実践は、単純に教育の場を同じにするかどうかという議論だけでは捉えきれないものであった。

Blooming Tree では、子ども一人ひとりの行動や発達を丁寧に観察し、データに基づいて分析しながら、その子にとって最も適切な支援を検討していた。そして、コミュニケーション能力や生活能力を高めることで、子ども自身がより主体的に参加し、自分らしく成長できるよう支援していた。その過程では、教師や専門職だけでなく、保護者も共に子どもの成長を喜び合い、その可能性を信じながら支援に関わっていた。

私は、その姿から「子どもの最善の利益」に徹底して焦点を当てた教育の在り方を学んだ。そこでは、教育の形や制度そのものが目的ではなく、一人ひとりの子どもがより豊かに生きることが目的となっていた。そして、その積み重ねは子ども本人だけでなく、家族の安心や希望にもつながっていた。

今回の研修を通して感じたのは、私たち教育に携わる者が見失ってはならないのは、「どこで学ぶか」という形式ではなく、「その子にとって何が最善の利益につながるのか」という視点であるということである。真のインクルーシブ教育とは、単に同じ場所で学ぶことを意味するのではなく、一人ひとりの子どもが尊重され、その可能性を最大限に発揮しながら成長できること、そしてその子を支える家族も含めて幸福につながる環境を実現することではないだろうか。

Blooming Tree で学んだ実践は、そのことを改めて考えさせてくれるものであった。私自身も今後、子どもの最善の利益を常に中心に据えながら、一人ひとりに寄り添った教育・保育の実践を追求していきたい。